大学+α

ことば力養成講座

チャイナ・フリー

「China-free（チャイナ・フリー）」と商品に表示する動きが、米国を中心に広がっている。安全性に疑問のある中国産品は含まれていない、と強調するものだという。

この「～のない」という意味の「フリー」は、「デューティーフリー（免税）」でおなじみだろう。健康への関心の高まりとともに、「アルコールフリー」「ミルクフリー」などの言葉が近年増えているという。

例えば「スモークフリー」は、たばこを吸わない人向けに「たばこ」で嫌な思いをしなくても大丈夫」という意味だ。これを「たばこ吸い放題」と読むと大間違いになる。

日本人は「フリー」を「自由」「好き勝手」ととらえがちだが、本来、何らかの拘束から解放された状態を指す。一方、「ノースモーキング」は喫煙者への「吸わないで」という呼びかけだ。

「チャイナ・フリー」は、中国産品を「ノー」と強く否定はせず、含まれないから安心してという肯定的表現――東洋大の有光奈美講師（認知言語学）はそう指摘する。

最近、ネットで目にする「リンクフリー」は「リンクはご自由に」という和製英語。英語圏の人は「妙なリンクがなくて安全なの」と思うかもしれない。

（校閲センター・水野幸子）

訂正　17日付「母校愛教える授業続々」の記事で、「大阪大学の歴史」で教壇に立つ「大杉英一副学長」とあるのは「高杉英一副学長」の誤りでした。訂正します。

近藤准教授の 紙上特別講義

国際協力とボランティア 1

「助ける」側になるために「助けられる」自分と向き合う経験が必要です。

近藤　麻理

こんどう・まり　岡山大学大学院保健学研究科准教授。川崎医療短期大学で看護師資格を取得後、働きながら和光大学を卒業。タイ・マヒドン大学で修士号取得。99年から約1年、民族間の紛争が起きた旧ユーゴのコソボで、AMDAのコーディネーターとして難民支援の活動をした。

災害や紛争に見舞われた世界の人々の救援にあたる非政府組織（NGO）をめざす若者が増えています。岡山に本部がある国際医療NGO「AMDA（アムダ）」＝キーワード①＝の活動にかかわっている近藤麻理・岡山大学大学院准教授に、国際ボランティアで大切なことについて語ってもらいます。

国際ボランティアに必要な資質は何でしょうか。英語力、体力、それとも専門技術でしょうか？

私は看護師の資格を持っていますから、専門技術はあるといえます。でも、英語は得意ではないし、体力も自信はありません。なんとか仕事で使える程度に英語を話せるようになったのは30代半ば。小学生のころは逆上がりも跳び箱もできませんでした。

もちろん英語は上手なほうがいい。でも、語学の得点が高くても、コミュニケーションの下手な人はいます。現場では、ペラペラと話せる能力が重要なのではなく、人と調和する能力が求められます。私たちが現場で接する人の多くは、その国の言葉を話す普通の人々なのです。

災害や戦争で被災した人を助けに行くのですから、専門的な知識と技術はあって当たり前です。しかし、コミュニケーション能力を磨くことを怠ると、助けられたはずの人々を結果的に殺すことにさえなります。

私が講義で伝えたいのは、技術ではなく、「人はなぜ人を助けるのか」という問いへの答えです。

誰しも、一生のうちには援助される側にも援助する側にもなり得ます。けれど、普通に生活している時は援助する側の自分だけをイメージしがちです。

被災者や避難民も、たいていは普通の暮らしをしてきた人たちです。前日まで、温かい料理を食べていたことでしょう。例えば日本の避難所で「救援食料のおにぎりが冷たくて嫌だ」と文句を言う人がいて、援助する側がカチンとくることがありますが、どちらも当たり前の反応です。

文句を言い合っていい。援助される側に「ありがとうございます」とばかり言わせてはいけないのです。いつ立場が入れ替わってもおかしくない、対等な人間同士なのですから。

援助する側が、患者や被災者に「かわいそうな役割」を演じさせていないか。そういうことを意識できるようになるため、援助する側になろうと考える人は、何者でもない無力な自分、誰かに援助されなければ生きていけない自分と向き合う経験をした方がいいと思います。

私たちは「助けてあげたい」と言うばかりで、「助けて」と言えない人間になっていませんか？

若い人には、1カ月でいいから、日本以外の国を1人で旅してほしい。言葉は理解できないし、お金も減っていくし、情けなくなる場面が多くあります。独りで生きていると思い込んでいた高慢さに気づき、色々な人に助けられていることが身にしみてわかります。その経験は、1人でサバイバルしなければならない国際協力の現場で、十分に役立ちます。

普通の市民が紛争地に行くことの意味。私はそれをコソボ紛争＝キーワード②＝で学びました。

キーワード

①AMDA　特定非営利活動法人アムダ。旧名はアジア医師連絡協議会。84年に発足し、被災地での緊急医療支援や途上国での病院建設・保健衛生教育などをしている。アジアやアフリカなど29カ国に支部がある。昨年、国連の経済社会理事会に政策提言できる「総合協議資格」を得た。

②コソボ紛争　旧ユーゴ連邦（セルビアとモンテネグロで構成）からの独立をめざしたコソボ自治州で90年代後半、多数派のアルバニア系住民とセルビア人の対立が激化。武力介入した連邦軍やセルビア治安部隊が撤退を拒否したため、99年、北大西洋条約機構（NATO）軍が旧ユーゴを空爆した。コソボは現在、セルビア共和国の自治州で、NATO主体の軍に守られながら独立をめざしている。

外国へ1カ月一人旅してみる。言葉、お金…無力さ痛感します。

《記者から》

04年12月のスマトラ沖大地震・インド洋津波の被災地インドネシアのバンダアチェや、その3カ月後に大地震に見舞われた同国のニアス島の惨状を取材しました。そして1年後。国際的な注目を浴びたバンダアチェでは、NGO同士の縄張り争いや不必要な施設の建設などが起きていました。一方、注目度が低いニアス島からは多くの団体が撤退。AMDAは残り、漁村で復興住宅を建てていました。国際援助のあり方を考えさせられました。

（小倉いづみ）

近藤准教授は以前、月刊の専門誌「看護管理」に「エイズと共に生きる人々と看護職者たちｉｎタイ」の題でエッセーを連載していた。いずれ、タイでの体験を本にまとめることを考えている。

受講生のみなさんへ宿題

日ごろから、困ったときに素直に「助けて」と言い合える関係を周囲の人と築くことが、国際協力の現場に向かう第一歩のようです。しかし、「援助される側の自分」はイメージしにくいものです。これまでに、入院したり災害に遭ったりして援助される側になったとき、援助する側との間にどんなことがあったか、どんなことがうれしく、どんなことが嫌だったか。体験を500字前後でお寄せ下さい。